
ハムスターさえ養えない男

SEI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハムスターさえ養えない男

【Nコード】

N9080R

【作者名】

SEI

【あらすじ】

男は今年で三十三になる生粋のニート。ハムスターさえ養えやしない。おまけに性格まで破綻している。そんな男がとうとう彼女に愛想を尽かされた。

ひとりぼっちになった男。そんな男の元に年端もいかない少女が現れた。

ひよんな事から男とその少女（星香）はなぜか一緒に同居する事となってしまう。

少女の正体は？ はたして男はニート脱却できるのか？

NHKとは似てません。

ハムスターさえ養えない男

ハムスターさえ養えない男

「もうこりこりよ！ うんざりだわ！」

突然の事だった。今日は優（俺の恋人）が俺の部屋に来ていた。洗濯やら掃除やらと身の回りの世話をしにやってきていたのだ。そんな優を尻目に、俺はテレビゲームに熱中していた。スパイスマンというアクションゲームでまさに今ボス戦で銃やら剣で戦っている時。

そんな時、突然この言葉を吐かれたのだった。

ゲームにのめり込みながらも優と適当な話をしていたはずなのだが、さて何の話をしていたのだろうか……。思い出そうと頭をひねるがまるで思い出せなかった。

俺は優の顔を覗き見た。目がつりあがり顔が紅潮している。その鋭い眼光は俺を捉えて離さない。かなり怒っているのがわかった。

「いいかげん就職しようと思わないの！？ 私たちもう三十三だよ？ いつまで無職でいるつもりよ！？……もう、しっかりしてよ！ そういえば……言われてみればそんな話をしていたかもしれない。適当に相槌をうつっていたはずなのだが何を突然キレているのだろうか。」

俺はそのまま疑問を口にした。

「あのさあ、なんでいきなりキレてんの？ 突然すぎて訳わかんないんだけど」

「突然じゃないでしょ！ もう何回……ううん。何十回も話してるじゃん！？ なのに聖ったら全然話きてくれないじゃん！」

「いやだからさ、そうじゃなくて何で急にその話になって勝手に一人でキレてるんだって話だよ。そんな話また今度でいいだろ？」

俺は心底うんざり、といった様子で返事を返した。

スタートボタンを押してテレビ画面に視線を戻しゲームを再開させた。

……やばいな、体力が無くなってきた。などと熱中してボタンをカチカチと鳴らせていると優が横から手を伸ばしてきた。

「いい加減ゲームなんか辞めて話聞いてよ！」

「ちよつちよつと待てよ！ 何すんだよ！」

「いい加減にしないとゲーム消すよ！」

優の指先がリセットボタンへと添えられた。

「おまえ……ッ！」

俺は鋭い目で優を睨みつけた。しかし優は折れるつもりがないようにで力強く視線を返してくる。

「……あーあーわかったよ。なに？ なんなの？」

諦めてコントローラーを脇に置き、不機嫌な顔を隠そうともせず
に優に向き直った。

「これからの事どう考えてるの？」

「これからって？」

「就職の事に決まってるでしょ！」

優がバンつと机を強く叩いた。

「ちゃんとやってるよ。話はそれだけ？」

「何をやってるの？」

「は？」

「ちゃんとって何をやってるの？」

「何をってそりやお前……」

俺は言葉に詰まった。なにせ就職活動たらは何もやってない。なにせ就職するつもりなどさらさらないのだから当然だ。

「お前には話してないけど、俺は俺なりに色々やってるんだよ」

「嘘でしょ」

優はぼそりと小さな声で、しかし妙に力強い声で囁いた。その瞳は相変わらず真っ直ぐ俺を捉えて離さない。

その真剣な眼差しに思わず「まあね」と本音を言ってしまうそう

だった。まあ言わなくとも嘘だとバレているようだが。

「何なの……何で？ もう私聖が何考えてるのか全然わかんないよ」
優の瞳は今にも涙がこぼれてきそうだった。

「あの、さく前から言ってる事だけどさ、仕事ってやりたい事やらなきゃ続かないと思うんだよね。実際俺そうだったじゃん？ やりたくもねー仕事だったけど単に採用されたからって理由で働いて。そんなんじゃないだろ？ だから本当に好きになれる仕事探してるを探し……」

「いい加減にしてよ！」

俺の言葉は優の怒声にさえぎられた。

「もう一度言うけど私たちもう三十三才なんだよ！？ そんな事言ってる余裕なんか……！ ちよつとは……ひつく……真面目に考えてよ……」

優はとうとう泣き出してしまった。ぽろぽろと涙が頬を伝い床に落ちてゆく。

自分の彼女が自分のせいで涙を流している……そんな状況にあっても俺の頭の中にあるのは（ああ……面倒臭い……）という事だけだった。

はあ、思わず溜め息がこぼれた。

俺は仕方なくティッシュをたぐり寄せて優の涙を拭ってやった。
優の瞳からは、こんなに涙が出るのか？ と驚く程に涙が溢れてくる。

「ひつく……ひつく……」

やがて優は少しずつ落ち着きを取り戻したが目頭を押さえたまま俯って動かなかった。

「……私、お見合い……しようと思うんだ……」

優がぼそりとそう言った。

「はあ？」

「相手は三十五才でね、豊多自動車の営業部長なの。年収は一千万くらいあるんだって、会社でも期待されてるらしいの、優しい人ら

しくてね、それから……」

優はからくり人形の如く淡々とお見合い相手の経歴を喋り続けた。聞いてもない事をぐだぐだぐだと……俺はそれを聞いていてイライラが募って仕方がなかった。

「なあ！……いい加減にしてくれっかな。俺が回りくどいの嫌いだって知ってるだろ？ 何？ 何が言いたい訳？ 俺にひき止めて欲しいわけ？ その相手と俺を比べてやる気にさせようとか考えてんの？ は！ うざっ。お見合いでもなんでも好きにすりゃ良いじゃねーか、勝手にしろよ」

「……………ッ」

優はビクッと全身を萎縮させ、俯いていた顔をあげると俺の顔を頼りなく覗き込んできた。涙を流し続けたせいで目蓋が腫れぼったく眼球は充血している。

「なんだよ」

「私……聖の事本当に好きだったよ。働かないで、毎日遊んでばっかで長所なんて見つけるのも大変なくらいなのに……でもなぜだか好きだった……」

一呼吸おいて優は静かに言った。

「だけど、もう終わりだね……」

優がすつと立ち上がる。まるで幽霊のように存在感が希薄だ。そして音も立てずにするすると歩き部屋から出て行った。

キキーボタンという扉の無機質な音が響き、俺は一人部屋に取り残された。

「これ……邪魔なんだよな」

部屋の片隅にハムスターのゲージが置いてあった。一月程前に優がどうしても欲しがったので仕方なく飼いだめたのだ。

ふと覗き込むと……

ハムスターは死んでいた。そう言えばもう四、五日……一週間くらいエサも水もあげていない放ったらかしの状態だった。

「優にもちゃんとエサやってれば良かったのかな」
俺はそう呟くと、何事も無かったかのようにテレビゲームを再開させた。

パチンコ屋に入り浸る男

2

二鷹駅にはパチンコ店が五店舗ある。地域密着型のサクラグループの系列が四店舗。さらに一月前、東北地方の大手チェーンEMSSが初の関東進出でランドオープンし、二鷹駅には計五店舗のパチンコ店が出来た。

かつてサクラグループのみが二鷹駅を独占していた時は、まさにぼったくりという酷い地域だったが、EMSSの進出によって二鷹駅は一気に様相を変えた。

EMSSは二鷹駅に出店してから過激なイベントを頻繁に行なった。東北の事情はわからない事だが、大手チェーンという事なので資金力が豊富だったのだろう。

傍目でも高設定を使っているのが明白なスロット、素人目にもわかるような良釘のパチンコ。

EMSSは大成功のランドオープンを遂げて、一ヶ月経った今でも御礼満杯の大盛況だ。

しかしそれはサクラ系列の店舗が廃れる原因とはなかった。このEMSSに徹底対抗したサクラグループはこれまでの営業を一転させて、こちらにもまた優良店舗の一つとなった。

EMSSの出店をきっかけにサクラ系列は対抗し、それによってまたEMSSが対抗するという、まさに好循環。二鷹駅は今、都内でも有数な優良地域へと変貌を遂げていた。

今俺は、そのEMSSの前で朝の並びに参加していた。前後を見るに、並びはおよそ三百人くらい居るようだ。

デパートくらい大きな店舗のまわりをずらっと囲むように人が列を為している。

EMSSの入場方法は抽選、朝九時に整理券の配布が終わり九時

三十分に抽選が始まる。

……さて、今日は良い番号を引けるだろうか。

今日の狙いは既に決まっている。リンかけ（リングにかける）の1048番台、前日の据え置き設定狙いだ。

この機種は周期CZの入り方で設定変更しているか見抜く事ができる。具体的には32Gごとに周期するCZは設定変更で0からにリセットされる。つまり朝一の挙動が32G以内にCZに突入すれば据え置き濃厚だという事だ。設定変更している可能性も高いが、それならそれで早い段階で見切る事が出来るしおそらくこれがベストの選択だろう。

もうすぐ抽選時間だ。胸が高鳴る、気分が高揚しているのがわかる。

ほぼ毎日並んでいるにもかかわらず、この瞬間のドキドキ感は変わらないものだ。

そしてそんな感覚が溜まらなく楽しいのだ。

十時になった。二百人程に減った行列が先頭から順に店内へと進んでいく。

俺の番号は七十番、なんとも微妙な番号だ。

順々に列は進み、五分程遅れて俺は店内へと足を踏み入れた。身体が震えるほど大音響のBGMが出迎えてくれる。

狙い台のあるフロアは三階。店内に入ると同時にダッシュで階段へと向かい、そのまま三階へ。

三階にたどり着き、はあはあと乱れる息を正しながら島（台の列）を一瞥。やはり最新台と人気機種はもう一杯だ。

俺の狙い台リンかけは大丈夫だろうか。歩速を緩める事なくさらに奥の島へと向かった。

……あつた。まだ空き台だ。ほっと胸をなでおろす。

さっそく稼働させよう、もし設定変更されてたなら即刻台移動す

る予定だ。しかし早くしないと他の台も早々に埋まって打てなくなる。

隣台にはさつそく他の客が座り始めている。急がなければ。サンドに千円札を突っ込みメダルを出す。

さて、昨日チェックした限りでは、あと十回転でCZに入るはず。すばやく投入口にメダルを入れ回転させる。

七、八、九……そして十回転。

にやりと笑みがこぼれる。据え置き確定だ。

リンかけの機械割は119%。フルウエイト（最速の打ち方）で廻して九千五百回転。期待値は十万八千三百円の時給約八千円コースだ。

思わず笑みがこぼれるのも無理ない話だ。

ちょうど隣に座った台も周期CZに突入していた。こちらも据え置きのようなうだ。その台は昨日マイナス三千枚（六万円）を吸い込んだ推定設定一の台だ。

朝一から低設定を狙って打つなんてバカな奴だ、と今度は嘲笑的な笑みがこぼれる。養分ざまあというやつだ。

まあその養分達のおかげで俺のような生活が成り立っているのだからありがたい事だ。

そう俺は専業、パチンコを生業とするその道のプロだ（自称）。働かない事を心に決め、この道一本だけで生活してもう三年になる。

……さて今日も稼がせてもらうか。

煙草に火をつけて意気揚々とレバーを廻す。それにしても勝利を確信したギャンブルほど楽しいものはない。

『当店は　あとわずかの時間を持ちまして　閉店となります
なお確変中???ART中の台に關しまして　一切保証は　致
しませんので　ご注意ください』

十時半になった。いつもと同様に一方的なアナウンスが流れる。俺は両腕を上には伸ばしぐいっと伸びをした。

……疲れた、尋常じゃない程までに疲れた……

体中から小気味悪いぐぐぐと骨がきしむ音がする。まるで錆び付いた機械音のようだ。

朝の十時から今まで、約半日もの間狂ったようにレバーを廻し続けた。食事はカロリーメイトのみ、煙草は二箱が空になった。

長時間煌々と光り続ける台に向き合っていた為頭はくらくらするし大音響で耳もおかしくなっている。

まったく楽な仕事じゃない、だが、

見上げればそこにはドル箱が六箱。およそ7000枚が積み重なっている。

現金にして十四万円。今日の稼ぎだ。

それを思うと疲れも吹っ飛び爽快な気分が満たされる。

大勝した時の嬉しさは何度目になっても変わらない。

そしてやっぱりそんな感覚は溜まらなく楽しいのだ。

こんな生活がいつまでも続いていけば幸せだな、と本気で思うのだった。

店を出ると外は真つ暗だった。人並みも少なく朝とは大違いだ。

強い風が吹いていて非常に寒い。息を吹き出すと白い吐息へと変わる。

それにしても疲れた。全身の関節は凝り固まり空腹も限界だ。

「あっそうだ」俺は思い出したように電話を取り出した。

相手は俺の恋人、優の番号だ。久しぶりに飯でも奢ってやろうと思っただのだ。

電話のコール音が鳴る。プルルル……

なかなか繋がらない。

寒空の下、イライラしながら電話をコールし続ける。

そして呼び出しの電子音を無意味に数えていると、ようやく電話が繋がった。

「……………何？」

何故かくぐもったような暗い声が聞こえてきた。

「おい、さっさと電話出るよな、何やってたんだよ」

「別に……………で何？」

「飯食いに行こうぜ、奢ってやるよ。今家にいんの？」

「……………」

なぜか返事は帰ってこなかった。電波が悪いのだろうか？と思いもう一度尋ねる。

「おい、聞こえてんのか？ 今何処いんだよ？」

「なんで？」

どこか攻めるようなきつい口調だった。機嫌でも悪いのか？

「は？ なんてって何が？」

「……………もう……………もう電話して来ないで！」

「はあ？」

そしてプツンと電話が切られた。プープーと通話が切れた音が受話器から聞こえてくる。

「なんだ？ こいつ……………」

意味不明な態度に困惑し、やがてイライラが募り始める。

……………けっ！

唾を道路に吐き捨て乱暴に携帯を閉じる。

今日は大勝出来て最高の気分だったというのに水を刺された気分だ。

「……………さみいな」

冷たい風がピューと吹き荒れ、全身を包みこむ。身体の芯まで冷えそうだ。

さっさと帰ろう。そう思い俺は家路へと急いだ。

自分本位な男

パチンコ屋の駐車場から原付に乗り込んで、大通りを走る。十分程走らせ脇道を抜けると俺の家が見えてくる。築何年経っているのかわからない程ぼろぼろの木造アパート二階建てだ。

俺の部屋は二〇一号室、階段を昇ってすぐ脇に俺の部屋がある。ドルンドルンと今にも壊れそうな排気音をさせた原付を駐車場に止め、階段を登る。錆び付いた鉄製の階段は、静かなアパートに足音を響かせる。

……家に帰ったらカップ麺でも食べて早々に眠りにつこう、もう疲れ果てた。

そんな事を考えながら二階へと昇る。

部屋に入ってようやく今日の疲れを癒せる、そう思っていたがその思惑は余りにも予想外な出来事によって疎外された。

「……………」

足を止める。そして家の扉へと視点をもっていられる。

一瞬幽霊にでも遭遇したのかと思い、心臓がビクンと跳ね上がった。

「な、なに？」

俺の家、古びた青い扉の前に体育座りになった少女がいた。両足を両手でぎゅっと抱き寄せ小さく縮こまっている。

「えっと……その……」

その少女は俺の姿に気付くと俯いていた顔を上げ、静かに立ち上がった。

立ち上がるとその身長は俺の胸の辺りまでしかなく、百四十センチ程だろうか。顔は幼く、一見すると小学生くらいにも見える。

「あの、あたし！ い、行く所ないんです」

長い事外に居たのか全身をぶるぶると震わせながらその少女は言った。

「泊めて……泊めてもらえませんか？」

「は、はあ」

俺は首を傾げる。意味が分からなかった。

その少女の顔をあらためて見るが知り合いという事では無さそう
だ。こんな小さな子供の知り合いなど居るはずも無い。

つまり家出かなにかって事か……？ 俺はそうあたりをつけた。

「お、お願いします！」少女が頭を下げる。

「だめ」

俺は一言で一蹴し懷から鍵を取り出す。そして少女の脇をすり抜
けようとするとその少女が遮るように前に出てきた。

「お願いします！」

ちっ、思わず舌打ちする。

「だめだつて言ってるだろ、どけ」

抑揚の無く返事を返し、右手で押しのけようとするが、少女は断
固として動かなかった。そして

「お願いします！」と頭を下げ続けるのだった。

「だめだ、さつさと家に帰れ」

「行く所ないんです……お願いします！」

「お前の都合なんか知るか、帰れ」

「お願いします！」

何度「どけ」と言っても頭を下げるだけの反応、その押し問答が
何度も続き俺はとうとう怒声をあげた。

「……ッ！ いい加減にしろ！ 警察呼ぶぞクソガキが！」

少女の身体がビクンと萎縮し、小さな身体をますます小さく縮こ
らせた。

「行くところがない？ そんなの俺には関係ねえよ！ さつさと家に
帰れ！」

しかし少女は壊れた人形のように同じ言葉を続けるのだった。

「お願い、お願いします……」

その声は震えていた。頭を下げているのでわからないが泣いてい

るのかもしれない。

だが俺にはそんな事は関係ない事だ、ガキの涙に騙される程バカじゃないしお人好しでもない。

しかし……この深夜に泣かれるのはちょっと面倒だった。

「……わかったよ」

俺はズボンのポケットから財布を取り出す。中身は今日の勝ち分のおかげで萬札が溢れている。その中から一枚抜き取り眼下で頭を下げる少女に差し出す。

「えっ？」

「それだけありや、なんとかなるだろ」

「そんな、こんなのもらえませ……きゃっ！」

そして少女を強引に蹴飛ばした。小さな身体が冷たいコンクリートの廊下に投げ出される。

その隙に鍵を開け、俺は扉を開いた。

「それで家出でもなんでもまあ、適当に頑張れや」

「お金なんかいらないますから、一晩だけでも泊めて……」

「じゃあな」

少女の言葉を遮り扉を閉める。ロックをかけると、その音は夜のアパートに冷たく響いた。

……ふう～疲れた。

部屋に入り深く一息をついた。重たいコートを脱ぎ捨てて電気と暖房をつける。

いつのまにか食欲も消え失せていて、それよりもただひたすらに強い眠気に襲われた。

頭がふらふらしてもう何も考えられない。家に帰ったらしなければならぬ事がたくさんあったというのに……

俺はジーパンのままベットに倒れ込んだ。そして最後の力を振り絞って携帯を取り出し今日のイベントについて再チェックを始める。

……今日二十二日ぞろ目のイベントは1/2金銀機種が三機種、今日は緑と鬼とエウレカ……だったかな。エヴァかと思ってたけどやっぱりARTに入れてきたか……全機種金入りでリンかけは俺の台だけだったな、それからジャグラーにもいくつか設定はいつてたな、多分昨日の据え置きが半分くらいあつたしやっぱEMSSは据え置き多い店なんだな……それから……えつとなんだっけ？

もう限界だった。まともな思考なんか出来やしない。

……もういいや

頭を思考状態から解放し、瞳を閉じた。

しかし

「……………」

まさに意識を手放そうとするその時、妙な音に眠りを妨げられた。
「……？　なんだ？」

妙に心にノイズを残す嫌な音だ。なんの音だ？　と思い、俺は耳を澄ませる。

「ひつく、ひつく、ぐうん、ひん」

泣き声だ。

玄関口から聞こえてきている。状況から考えてあの少女が未だに扉の前に居座っているのだろう。

「マジかよ、あのくそガキ」

思わず悪態をつき毛布を頭までかぶった。これで聞こえなくなるはずだ、そう思ったが微かにだが確実に泣き声が聞こえてくる。

俺は寝付きが悪い、いつもと同じ枕じゃないと眠れないという程ではないが、いつも旅行先のホテルなどでは、眠るのに苦労する。

おそらく潔癖性なのだろう、気になる事があるとなかなか眠れないのだ。

このまま無視して寝入るのは不可能だった。

「勘弁してくれよ」

俺は重たい身体を起こし玄関へと向かった。そしてガチャリ鍵を解いて冷たいドアノブをゆっくり回した。

扉を開くと思った通り、少女が目蓋を腫らせてうずくまっていた。そしてゆらゆらと揺れる瞳で俺を見上げてくる。

「ほら入れよ」

「ぐすん、えっ……？ あん」

「いいから入れよ」

少女の手をとり、部屋へと引つ張りこむ。

動揺しているのか、少女はそのまま部屋の真ん中で立ち尽くしていた。

「えっと……あたし……」

俺はベットのがある隣室から毛布を取ってきて、立ち尽くす少女に投げつけた。

「……勝手にしろ」

それだけ言って隣室の引き戸を閉める。

「ありがとう、ありがとうございます！」

その声を背中に聞きながら俺はベットへと身体を沈め、今度こそ眠りへとついた。

4

目覚ましが鳴るでなく、日常の習慣でもなく、ただ自然と自発的に目を覚ました。窓の外を見上げると、日の光がとても眩しい冬の青空が広がっていた。

……なぜだろう？ 不思議だ……？

俺は首を傾げる。本当に不思議だった。

なぜ太陽が出ているのだろうか？ いつもならこんな時間（日の出ている時間）に目を覚ます訳がないのに。ましてや昨日は終日稼働でEMSにいた。そんな日の翌日は大抵、肉体的と精神的疲労で十二時間は寝るのが常だ。

実際、今だって身体も頭脳も起き上がる事に拒否反応を起こして

いる。まったくなんでこんな時間に目覚めたんだ？

「……………ん？」

俺は鼻をくくんとならせる。引き戸の向こう側　居間の方からなにか香ばしい匂いがただよってくる。

同時に腹の音がぐううと高音を鳴らせた。脳が急速に空腹を思い出したようだ。

重たい身体をひきずりながらのろのろと起き上がり、俺は引き戸をガラリと横に開いた。

「あ…………」

少女が台所に立ってなにやら料理を作っている。俺の姿を認めるとおどおどとした表情でこちらを見ながら短い声を漏らした。

そう言えば…………俺は昨日の夜の事を思索し、そして思い出す。昨日家出少女を家に泊めたのだった。

「ごつごめんなさい！　勝手に台所使っちゃって」

少女は怯えた様子で言葉を吐き出し、頭を下げた。

そしてゴクンと息を飲み込んで遠慮がちに言葉を続けた。

「それで、その…………ご飯作っただけですけど…………食べて、食べてもらえませんか？」

卓に付き五分程待っていると、少女が次々と料理を乗せて運んで来た。朝ご飯にしては豪勢な、料理に素人な俺でもわかる程手の込んだ料理たちだった。

まだ中学生くらいだろうにたいしたもんだ。

「はい、どうぞ」

差し出された白飯を無言で受け取りガツガツと口へと運んだ。うまい。正直久しぶりに食べる家庭料理の味は最高にうまかった。

「あの、まずくないですか？　大丈夫ですか？」

無言で食べ続ける俺を心配そうに見つめながら、上目使いで尋ね

てきた。

その言葉に俺は違和感を覚えた。

優と付き合い始めた頃、優は度々うちに料理を作りに来て、優の腕はいまいちで見た目も味もたいした事が無いのだが「ねえ、美味しい？　ねえどう？」と自慢げに何度も尋ねて来るのだった。

そういえばはつきり「まずい！」って言ったら本気泣きされた事があったな、それが原因ではないだろうが、結局自分でも向いてない事を悟って料理をする事はなくなったのだが。

「あの、まずかったら言って下さい、すぐ作り直しますから」

……変な子だ。やたらとビクビクとしていて常に何かに怯えているようだ。

「別に……まあしいて言うならもつと濃い味のが好みか」

「ごつごめんなさい！　私知らなくて……。不味かったですか？」

不味かったですよね？　ごめんなさい、すぐ作りなおしますから！

「ちよ、いいから！」

料理を片付けようとする手を慌てて制止した。少女は「でっでも……」と困惑した表情を続けている。

本当に変な子だ。

少女は絶えず心配そうな顔をしながら、俺が飯を食らい終わるのをじつと無言で待ち続けた。

そして俺が一息ついたのを見計らって

「あ、あの私、星香^{せいか}って言います」

と突然名乗りだした。

「はあ……あつそ」

「少しの間……ここに居させてもらえ……もらえないでしょうか？」
おずおずとそう言った。

「はあ……？」

正直いつてこの星香と名乗った少女の言葉は考えていた予想通りだった。家出てきたんだから当たり前だ。……まったく面倒な事になりそうだ、いやもう面倒な事になっているのか？　もうこれ以

上は御免だ。

「ダメに決まってるんだろ」

俺は星香に背を向け、すつくと立ち上がった。こんな早朝に起きてしまったので眠くて仕方ない。それにもうこのガキと話すのも面倒だった。

「お願いします。私なんでもするし迷惑なんかかけませんから」

星香は立ち上がった俺のズボンの裾を掴み懇願した。

……ああうざったくてしょうがない。

「うるせえな、居るだけでこちらら迷惑なんだよ！ さつさと帰れボケが！」

その手を強引に振りほどき怒声を吐きちらした。

「……私って……居るだけで迷惑……ですか？」

何故か『迷惑』という言葉に過敏に反応したようだった。急に星香の顔から生気が抜けたように思えた。俺は何か引つかかるものを感じたが構う事無く言葉を続けた。

「ああ、迷惑なんだよ。わかったらさつさと帰れ」

俯いてぺたんと床に座り込んだ星香を置き去りに俺は自室のベッドに向かうのだった。

次に目覚めた時、辺りはもう暗くなっていた。というよりはいつも通りの時間、時計を見ると時刻は二十時ちょうどだった。

くああ……とあくび、そして伸びをしてから居間へと向かった。

そして居間への引き戸を開いて俺は思わず眉をひそめた。

「お前……まだ居たのかよ……ってなんだこれ？」

苦々しくそう言うってから俺は部屋の異変に気付いた。ここは本当に俺の部屋なのか？ 視線を周囲に巡らせる。

ビールの空き缶、コンビニのレジ袋や煙草、その他諸々のゴミで一杯だった部屋が、その様相を変えていた。

部屋の隅々までほこり一つなく片付けられ、見ようによっては輝

いているようにさえ思えた。元の部屋の乱雑さを考えるとまるで別世界のようだ。

「おはようございます」

星香がひよこひよここと近づいてきて頭を下げた。

「私、ぜったい迷惑かけません！　ぜったい役に立ってみせます！　だから……お願いします、ここに居させて下さい！」

そしてもう一度深く頭を下げた。

「お願いします！」

……本当になんだこいつは？　少し変わっているどころか全くもって行動の意味が分からない。

俺は訝しげに星香を睨み、そして

「お前……何たくらんでんの？」と言った。

「そんな……何もたくらんでなんかいません、ただここに居させて欲しいだけで……その……」

そう言う瞳に嘘はなさそうだった。まあ俺に言葉の虚偽を見抜く審理眼があるわけではないがそう思えた。

「うーん……」俺は顎に指をあててしばし思索した。この星香というガキは使えるんじゃないか……と。

子供のくせに料理と掃除は完璧、この様子じゃ大抵の家事なら全て出来そうだ。それに俺に従順ときてる。

「そうだなあ……」俺はぼりぼりと頭を掻いた。

「お願いします！」

さてどうしたものか……俺は頭を悩ませた。そして妙案を思いついた。

そうか、条件をつければ良いんだ、と。

「じゃあ、俺の条件が守れるなら許可してもいいぞ」

「ほっ本当ですか！？」

星香は顔をあげるとパアッと明るい表情を見せた。そして「なんでも言う事聞きますよ」という星香にその条件を告げた。

「じゃあ一つ目。当たり前だけど俺に迷惑かけない事」

星香はうんうんと頷いた。

「二つ目、えっとお前家事できるんだよね？」

そう聞くと星香は「炊事洗濯なんでも出来ます！」と自信満々に言った。

「じゃあその家事とやらを全部頼む、出来るか？」

星香はまたうんうんと頷いた。

「最後、俺が出て行って言ったら即刻出てく事、これ重要だからな、出来るな？」

俺は語尾を強く言い念押しした。

「はい！ わかりました！ 私ぜったい迷惑になるような事しません。聖さんの為に全部の家事頑張ります！」

星香は嬉しそうに微笑んでそう言った。

……よし、いい感じだ。俺も満足気に笑った。

その時、俺の腹がぐうと音を鳴らせた。

「じゃあまた飯でも作ってもらおうかな」

「はい！ 了解です」

星香ははしゃいだ声でそう言うのと台所へと駆け寄っていった。

その後ろ姿を見ながら俺は心にざらりとしたものが流れるのを感じた。

……あれ？ 俺自分の名前乗ったっけ？

「……………」

そんな記憶は無い……

まあいつか、そう思い俺は煙草に火を点けた。

自分本位な男（後書き）

主人公が良い奴に思われたらキャラ崩壊な訳で……

気にしない男

早朝のＪＲ中央線、車内はスーツ姿のサラリーマンや学生服の若者で溢れていた。過乗車としか思えない人の群れがぎゅうぎゅう詰めに押し込められ、呼吸をするのも困難である。つり革につかまる事さえ難しい車内で俺は場違いな私服でその群れに押しつぶされていた。改めて思う……こいつら毎日毎日よくこんなストレスに耐えられるな、と。

俺には絶対に無理な事だ。事実俺には無理だった。かつて俺も普通に働いていた時期があった。高校からエスカレーターで入った大学はそこそこにレベルの高い大学だったので就職活動も楽に進み、いわゆるサラリーマンというやつに俺はなった。

自分でも思うが、あれは早かった。しかし五月病という言葉があるように普通の事なのだろうか？ 結論から言えば一ヶ月で辞めてやった。

その仕事が合わなかったとかやりがいが見付けられないとか、そんな理由は何もなくただ俺には……そう単純に無理だった。

魚が空を飛ぶ事が如く、俺が働くという事は不自然な事。そんな不自然な環境で無理して生きる事は不可能な事。

そう自分で悟った。そしてこの生き方に身を任せた。

電車がとまり、乗車口の扉が開いた。今日の目的地上野駅に到着だ。

今日は一日、月に一度のビッグイベントだ。上野は東京で最も熱いと言っても過言ではない地域で俺は月に二、三回の頻度で此処に通っている。

駅をおりてホール前に着くと、早くも四百人近い行列が出来上がっていた。

相変わらずすごい行列だ。平日の朝っぱらからよくこんなに集ま

るものだ。

自販機で買った缶コーヒーで暖をとりながら、その行列に並ぶ。抽選が始まるまでまだ時間がある。暇つぶしに、と携帯を取り出すとちょうどメールを着信した。

スロ友の石川からだった。石川は俺と同じような生活を送っている同業者だ。

『今日来てる？ 俺ケバブのあたり並んでんだけど』

俺は少し背伸びをして石川の姿を探してみた。ケバブの店はホルのすぐ前なのでほぼ先頭にいるという事になる。

さすがに四百人挟んだ前方にいる石川を見つける事は不可能だった。

『当たり前、今着いたとこだ』かじかむ指先で携帯に打ち込む。すると一分もしないうちに『だな笑、抽選引いたらコンビニで待ってるよ』と返信がきた。

『了解』と送り俺は携帯を閉じた。

四百人居た行列は徐々に進み、やがて俺の抽選順番がやってきた。ニコニコと不自然な笑顔を振りまく店員に促され抽選を引く。さあ、何番だ？ 俺は若干ドキドキしながら番号を確かめる。

「ぎえ！」思わず奇声をあげる。

朝起きは三文の得？ …… やれやれだ。

引いた整理券を静かに握り潰して、俺は石川の元へと向かった。

「よう、どうだった？」コンビニに着くと石川は開口一番にそう尋ねてきた。

俺は無言で整理券を取り出し石川の眼前につきつけた。

「五五七番！？」石川が吹き出し笑う。「それほぼ最後尾じゃねえか？」

「そういうお前はどうかんだよ」ムツとしながら尋ねる。
「いつひっひく三十番」

意地の悪い笑いだった。このやろう……

「石川、相談がある」

「ん？　なんだ？」

「それ交換しようぜ」

「はあ？　そんなののために決まってるじゃねえか」

「良いじゃねえか、どうせ女に貢がせてたんまり金持ってるんだろ？　それぐらい俺に譲る度量を見せてくれよ」

「おいおい譲れる訳ないだろ、それより俺何打つたら良いと思う？　この番号なら緑ドンも打てるよな、お前どう思う？」

「ああ、打つなら緑ドンだ、俺が打つからそれを俺にくれ」

「しつこいよ、その話。っていうか……もしかして本気で言ってる？」

「ああ本気だ、緑ドンが打ちたい」

俺は石川が持つ整理券をひったくった。

「あ！　てめえ！　なにすんだよ！？」

「俺は緑ドンが打ちたい！」

「お前いい加減にしろよな！」

石川が怒声を荒げた。本気で怒っているようだ。まあ当たり前か、三十番という番号は喉から手が出る程貴重な良番だ。だが、だからこそ俺も諦められない。なんとしても……！　それに俺には勝算もある。

「これまでお前には色々の良い情報まわしてやったよな」

「はあ？　なんだよ突然」

「いやなに、店の養分で借金浸けだったお前を救ってやったのは誰だったかって話さ」

石川はぐつと息を詰ませた。

「そう、おれだよな？　二百万あった借金も返す事ができた。あまつさえ仕事を辞めて専業にもなれたんだ。すごいよなー誰のおかげ

だ？」

「……そりやお前には感謝してるけ……」

「いいのか？」石川の言葉を遮り俺は疑問を投げかける。

「え？」

「專業になつてもう自信満々か？　これから自分一人でやっていけるのか？　どう思ってるんだ？　俺はお前なんか目じゃない程に情報持つてるんだぞ？」

そう、これが俺の勝算だった。石川はどうあつても俺には逆らえないのだ。

「もう一度言うけど、俺は緑ドンが打ちたい。どうする？」

迷うまでも無いだろ？　と目で圧力をかける。

「……わかったよ」石川は力なくそう言った。

ああ、やっぱり早起きは三文の得だったな、いやWhere t here is will, there is a way（意思あるところに道は通じる）か。ニヤリと笑い俺はそう思ったのだ。

結論から言えば今日の稼働は最悪だった。ああ、どうして今朝の俺はもう一つ隣の台に座らなかつたんだろうか、意味の無い後悔だけれど悔しくて仕方が無い。

石川から交換して（奪い取って）手に入れた整理券で無事に緑ドンを打つ事は出来た。しかしピンポイントで低設定の台に座ってしまったようだった。

石川の方も良い台を稼働させる事が出来なかつたようで、夕方六時の時点で二人して十万近く負けていた。

今日はもうまともな稼働はできない、そう判断して二人は駅前の居酒屋に来ていた。

「もう今朝みたいのは勘弁してくれよ？」石川がビール片手に愚痴をもらす。

今朝の事……俺が石川の整理券を奪った事だろう。

「ああ、わりいな」ビールで喉を潤しながら俺は淡々と謝った。

「三十番なんて番号、滅多に引けないから、つい……な？ まあどつちにしろ負けたんだからそんな気にすんなよ、な？」

我ながらなんて身勝手な言い分だろうと思ひ、自嘲的に笑みで口角があがってしまう。

「……はあ、今日は勝ちたかったのに……はああ」石川はやたら実感の伴った溜め息とともにそう言った。もしかしたら負けが込んでいるのかもしれない。

「まあ、そんな落ち込むなよ、はれ、携帯見てみな？」

俺は机上に置かれた石川の携帯を指差し、そう言った。

「なにこれ？ おお！」

「俺が集めたここ近辺の最新データだ。わかんない事あつたら何でも聞いていいぞ？」

「す、すごいなこれ……ふむふむ、A店はガックンが利くと、え、B店はそんな法則があるのか……ふむふむ、なるほど、勉強になるな」

石川は俺が送ったデータをしげしげと眺めながら確認するように独り言を続けた。基本的に真面目な奴なのだ。そして真面目にやらなければこの世界で專業などやっていけない。その意味で石川には才能があるといえる。

しかし……、俺はさっき見た石川の溜め息を思い出していた。

「なあ、最近ちゃんと勝ててんのか？」

俺らしくもなく少し心配になったのだ。せつかく俺が教えてやっているのだし出来るなら気分よく勝たせてやりたいと思う。

「うーん……全然だな、先月はちよつと色々あつて稼働日数が少なかったから全然稼げてないんだ」

石川は携帯から目をあげる事無くそう言った。そして

「最近彼女と別れて、な」と続けた。

「ははは、愛想尽かされたのか」俺は笑ってそう返した。

「いや、それが面倒な事になって……。てか俺が振ってやったんだけどな」ちよつとムツとしたようだ。

話を聞いてみるとその彼女は石川にベタ惚れだったらしい。ダメ人間が好きという女は確かに存在する。『蓼食う虫も好き好き』このことわざは本当なのだ。

そしてその女は石川に結婚を望んで仕方がなかったらしい。

この石川、実はかなりのプレイボーイで何人もの女と楽しくやっている。彼女とも本気で付き合っていた訳ではなかった。

「別にそんな好きでもなかったんだけど、あいつ金回りが良くてさ。それにちよつとひっかけたら簡単に落ちたからラッキーくらいに思っただけだ。……」

「だけど？」

「……その彼女に子供が居たんだ」

「ほほうっ」俺は目を丸くする。「子供かよ」

「笑えるだろ？俺今までそんな話一切聞いてなかったのによ。で俺その事知って、キレちゃってさ」

「思わずひっぱたいて別れたんだわ」

石川はゴクゴクとビールを飲み干して、あっさりと言いつつ放った。

その後もその彼女と色々で一悶着があったらしい。しつこくまとわりつかれてストーリーカーじみた事になったらしい。「精神的にも肉体的にも先月は最悪だった」と石川は疲れた声でそう言った。

「そりゃ……確かに大変だったな。まあ、お前は悪くねえよ。にしても子供か……年はどれくらいだったんだ？」

「うゝん写真しか見てないんだけど結構大きかったな。名前……なんだっけな、確かせ？しいか？だったか……もう中学生くらいの年だったろうな。」

「その彼女ってお前の三つ上、ああ俺と同年だっけ？ってことは三十三才だから……」

「うん、多分十代で産んだんだろうな」

「すごいね」俺は肩を竦めて両手をあげ、手の平を天井に向けた。

「まあ先月はそんな感じで忙しかったんだよ、あ、すいませーんビール追加で！」

「あ、追加二つくれ」

通りかかった店員にそう言つと「はい、かしこまりました」と快活な笑顔で言つて去つていった。

「お前の方は最近どんな感じ？」石川が尋ねてきた。

「俺か……最近、ねえ」

俺は腕を組んで思案に耽つた。優とはもう長い事会っていない。今までは毎日のように電話してきたり、家にやつてきたりしていたのに。なにがきっかけだったのかわからないがおそらくは……。

「別れた……つていうことになるかな」

「ふうん。愛想尽かされたか」石川は俺がさっき言つた言葉をそのまま言つた。

「まあ、たぶんね」その言葉はおそらく事実で、俺は言い返す気も起きない。

「あ、でも最近妙な事になつてさ……変な奴と同居してるんだ」

「へえ、手が早いな。つで、変な奴つてどんな？」

「うゝん……十代の女と同居中」

「ふうん、そうなん……つてええ！！ なつええ！！ 十代！？」

石川の顔が驚きの表情に歪み大声をあげた。そしさらなる追求をしようとしてきた時、店員がやってきてビールを二つ置いていった。「それつてどんな状況だよ！？」

「うゝん、それがだな……」

俺は新たに來たビールに口をつけながら、話を続けた。程よくアルコールがまわつていたのだろうか。

自分の話し口調がやたら饒舌なのに……つまり自分がとても楽しそうに話している事に気付いた。

俺はあのガキの事を結構気に入っているのかもしれないな。

星香と会つてからの一部始終を説明すると石川は眉をひそめて妙に真剣な口調でこつ言つた。

「それで……？」と

「それでって……それだけだけど？」俺は首を傾げた。

「それだけな訳無いだろ？ その子の家族は？ 年は？ 学校行くような年齢じゃないのか？ いやそんな事より、そもそもなんでその子はお前んちにやってきたんだ、その子は？」

……言われてみれば、俺は今言われた疑問にひとつも答えられない。何も知らない、興味が無いから何も聞いてこなかった。俺はただ、便利な優の代わりが出来たくらいにしか考えてこなかった。

「それってやばいんじゃない？」……そうかもしれない。

「家の物盗まれて来えるかもしれないし、何かの犯罪に使われてるのかも、何があるのかわからないけど普通じゃないよ」

「お前はめられてるんじゃないか？」

そんなバカな、確かに石川の言葉を何一つ言い返せはしない、だけ……。

「だけど、あいつはそんな奴じゃない」

そう、そんな訳ない。いつもおどおどと借りてきたネコのようになっているあいつが、なんでも俺の言う事を聞く従順なあいつが俺を騙している訳がない。

「なんでそんな事言えるんだよ？」

「なんでって……」

俺は頭をひねる。しかし

「なんでだろうなあ……」

考えてみてわからず、俺はそう誤摩化すしか出来なかった。

「はああ……」

石川の呆れるような溜め息が、なんだか異常にムカついた。

えげつない男

「ただいま……」ボソツとそう言つて扉を開けた。 実はこの言葉、星香が来てから初めて使う言葉だった。

例えば通行人、道端で見知らぬ誰かとすれ違つたら挨拶などするだろうか？ 誰もしないだろう。俺だつたらたとえ隣人の住人だとしてもそんな真似はしない。

何故か？ 興味が無いからだ。道端ですれ違う相手にいちいち關心など持つてはいられない。

それと同じように俺は星香に対して無關心を続けてきた。

だが今日は星香の事を知ろうと、つまり關心を持ったので自然とその言葉が出たのだった。

「あ、おかえりなさい」

部屋に入ると星香がやたら仰々しく頭を下げてそう言った。星香は異常と思える程礼儀正しくてこちらとしても気分がよい。

俺は部屋着へと着替えてから居間のテレビの前にどかつと腰を座り込んだ。

「ビール飲みますか？」

その横にちょこんと座り込んだ星香が尋ねる。

首を縦に動かし頷くと「わかりました」と嬉しそうに台所に向かつて行つた。

星香は俺の役に立てることが嬉しくてたまらないように見える。

改めて考えてみるとなぜなのだろう？ 少し薄ら寒い気がしてくる。

「はい、どうぞ」星香がにこやかな顔で缶ビールと冷やしたグラスを持ってやってきた。

俺は今まで缶ビールは直接口をつけて飲んでいた。それが変わったのは星香のおかげだった。まったく何処で知ったのかグラスを冷蔵庫で冷やして持つてきて、それがまた美味かったのだ。

本当に気が利く、否利きすぎる。何が星香をこうまでさせるのか。

プシュツとビールのタブを開きグラスに注ぎながら俺は単刀直入にあっさりその言葉を口にした。

「お前ってさ、何者なの？」と

「え？ ええと、それは……その……」 星香の態度はあからさまに動揺していた。

家事が万能だったり、気が利くといっても所詮は年端もいかない女子、動揺や感情を隠せるほどの場数は踏んでいないのだろう。

「やっぱり何かあんのか？」 続けて尋ねる。

「えつとですね……それが、その少し、なんて言うか……」

お茶を濁そうとしているつもりなのだろうか。口どもつてもごもごととしている。だが今日は星香の正体突き詰めると決めたのだ。

「今までお前にも事情があるんだろうと察して聞かなかったけどそろそろ話せよ」

……我ながら薄っぺらい嘘だなあとと思う。本当は興味が無かった、ただそれだけだ。だが子供相手ならこんな嘘も十分通用するだろう。「ほら、話してみな？」 きっと鏡を見たら噴き出してしまうような笑顔を貼付けて、星香に向かって微笑みかけた。

「私、嬉しいです。わかりました全部話します、いえむしろ聞いて欲しかったんです」

やはり子供だ、馬鹿正直に喜んでいる。

「そうか、でなんなんだ？ 何を聞いて欲しいんだ？」 俺がそう促すと星香は意を決したように語りだした。

「鷺沼 香って名前わかりますか？」

「さぎぬま、かおり？ ……誰だ、それ？」

異口同音にその名前を口にして首を傾げる、どこかで聞いた事のあるような名前だったが思い出せない。

「私のお母さんの名前なんです、あの烏山高校でバレー部だったらいいです、思い……出せませんか？」 星香の顔が不安気になる。

「高校？ バレー部……鷺沼……ああそういえば」

記憶のかけらが少しずつ浮かんできた。そしてそれらの記憶が結

びつくと急速に記憶がよみがえってきた。

「お前、香の子供なのか……懐かしいな」

遠い過去、学生時代の思い出がよみがえってくる。香……そうだ、高校の時俺と付き合ってた彼女だ。他にも学生時代の思い出が次々とよみがえってきて、懐かしくてたまらない。みんな今どうしてるんだろうな……。

香は今どうしてるんだ？ そう口にしようとしたところで俺は冷静に戻った。

ドクン、と心臓が高鳴る。

なぜ香の子供が俺の家にやってきたんだ？ 当然の疑問が浮かんできた。

この時すでに微かな予感がしていた。しかし……まさか……。

「それで……なんで俺のところに、来た……んだ？」息詰まりながら尋ねる。

「それは……私のお父さんだから」

「……………」

頭が真っ白になった。全くと言っていい程に頭が使い物にならなくなってしまったようだ。なんだ？ どうなってる？

俺は身体が昆虫のごとく硬直してしまい身動きひとつとれやしなかった。口を動かす事が出来ず、言葉を発つする事も出来ない。

「……………」

星香が何かを言っている。だが全く耳に入ってこない。

その後、俺が何をしたのか、翌日になるまで思い出せなかった。

この日から星香は俺の前から姿を消した。

翌日、目覚めると頭が異常に痛んだ。二日酔いだ……昨日馬鹿みたいに暴飲したせいだろう。

俺はそんなに酒が強い体質ではない。二、三本も飲めば十分に酔

っぱらっってしまう。だが床には空になったビール缶が十近く転がっていた。

「うっぷっ！」

起き上がると急に吐き気がこみ上げてきて、俺は台所に顔を突っ込んで吐きちらした。……気持ち悪い、最悪の気分だ。

気持ち悪かった……星香が俺に向かって「お父さんだから」と言った時、気色悪い虫が全身を走ったような感覚が襲ってきた。ぞわぞわっと鳥肌がたち、星香の存在が突然、気味の悪い他の生物へと変貌を遂げたかのようにだった。

「帰れ、帰れ、帰れ！出てけ、早く出てけ！」

そんな単純な言葉だけを俺は何度も何度も繰り返した。何も考えられず、ただただ拒絶する事しか出来なかった。

星香の腕を強引に掴んで追い出そうとしたが、不思議と星香は一切の抵抗を見せず、大人しく俺の言葉に従った。

「……やっぱり私って要らないんですね……」

悲しい眼差しとその言葉だけを残して星香は出て行った。

「くそッ！ 騙しやがって！」

床に散らばる空き缶を踏みつぶすと、缶底に残っていた残滓がじわっと床に広がった。……騙された、それは星香が自分の正体を隠していた事だけじゃない。理不尽で自分勝手な考えだとわかったが、それ以上に頭にきている事があった。

星香はただ単に献身的に俺の役に立とうと思っていたのだと、妄信していた。だが違った。星香は俺の為なんかでなく自分の保身の為、俺に気に入られようとしていたのだ。勝手な思い込みで、考えてみればあり得ない事だが、そう思っていたのだ。裏切られた気持ちだ。

それは例えるならば、可愛がっていたペットが突然喋りだし「お前と一緒に居るのはエサくれて都合がいいからなだけで、お前が好きな訳じゃないよ」と言われたような気分だった。

今なら認められる。俺は星香の存在を気に入っていたのだ。それが裏切られ苛立ちが押さえられない。

「なんなんだ、なんなんだ俺は？」

なんてくだらない、なんて……愚かなんだ？

その時ふと、床にノートが落ちていたのが目に入った。俺には見覚えのない物だった。拾い上げ中身をパラパラと開くと、一目でそれが星香の物だとわかった。

突然追い出したのだから忘れ物の一つあってもおかしくない。

「なんだ、これ日記か？」

ノートの中には丸っこい文字で几帳面にびっしりと書かれていた。先頭のページは二週間前の日付だった。

何気なくその内容に目を通す。パラパラパラ……と本当に何気なく。

やがて俺は言葉をなくし夢中で読みふけた。

想われない少女

気付いた事がある。例えばもし、私という存在が突然として消えてしまっても、誰も困らない、誰も悲しまない。問題なく私がいた時と変わらない、同じ日常が続いていくのだろう、と。

それじゃあ私は生きてる意味ってあるの？ 何の価値もないんじゃない？ 至極自然とそんな疑問が生まれた。そしてそれは私にとって恐くて恐くて堪え難いものだった。

お母さんの事を話そう。

過去の記憶をさかのぼって思い出してみても、いつも一人で遊んでいた事しか思い出せない。お母さんに遊んでもらった記憶は思い出せないだけで埋もれているのだろうか？ それともそんな記憶は始めからないのだろうか……。

私のお母さんはシングルマザーで二人だけの家族だった。お母さんは私に構ってくれる事もなく優しくしてくれた事もないけれど、たった一人の家族であるお母さんの事が私は好きだった。

そんなお母さんに嫌われないように私はあらゆる努力をした。炊事、洗濯、掃除などあらゆる家事など、小学校に入学する頃には大抵の家事は出来るようになっていた。

お母さんの役に立てるように、お母さんの邪魔にならないように、いつか私の事を褒めて……愛して欲しいから。

だから私は頑張って、頑張って、お母さんに振り向いて欲しくて、褒めて欲しくって……そして頑張り続けた。

私……お母さんの役に立てるよ？ 迷惑なんかかけてないよね？
なのに、ねえ、なんで？

お母さんの誕生日、私はなんとかしてお母さんを喜ばせてあげたかった。何をプレゼントしたら喜んでくれるか散々悩んで、結局手作りケーキを作る事に決めた。私が得意なのは日常的な料理だけ

でお菓子やケーキは作った事がなかったけれど、一生懸命頑張って作ろうと思った。

初めて作るケーキは分量とか難しい事が多くて、色々と大変だったけれど完成させる事が出来た。

あとはお母さんが帰ってくるのは待つだけ。苦勞して作ったケーキを冷蔵庫に入れて私は、お母さんが帰ってくるのを、今か今かと待ちわびた。

五時間程待っただろうか、時刻は十二時をまわっていた。でもいつもの事だ。そうお母さんが帰ってくるのはいつも遅い。もしかしたらお母さんは今日が誕生日だって事を忘れているのかもしれない。だとしたらびつくりするだろうな、きつと喜んでくれるはずだ。その時の事を思うと楽しみでしょうがない。

お母さんが帰ってきたのは、それからさらに一時間程経った頃だった。眠くて眠くて目蓋が閉じそうだったけど、私は勢い良く玄関へと向かった。

飲んで来たのだろう、頭はぼさぼさ、頬はほんのり桜色どころか林檎みたいに赤くなっている。だらしなく壁に寄り添いながら、ぶらんとポシエットを右手からぶら下げていた。

お母さんを驚かせてあげよう、そんな事考えなければ良かった。普通に「おかえりなさい」と言つて中に迎え入れておけば、こんな事ならなかったのに。今まで通りでいられたはずなのに、いやそんな事ないのか。どっちにしろお母さんは私の事が嫌いなのだから……

帰ってきたお母さんに向けて私はクラッカーを鳴らせた。パアンと快活な音と共にカラフルなテープのようなものがお母さんに向かって飛んでいった。

「お誕生日おめでとう！」

満面の笑顔で私は言った。頭にはパーティグッズの赤い三角帽を被っていた。部屋の装飾も完璧に施して、準備は万全だった。

その時お母さんが見せた表情は今でも忘れられない。壁に寄りかかり、乱れた前髪の隙間からじろつとした目で、私を睨めつけてきた。

そしてお母さんは持っていたポシエットを振り回し、全力で私にぶつけ、さらに怒声を発した。

「あんたが……あんたがッ！ いるから！」

なんで？ なんでお母さんは怒っているの？ どうなってるの？

「あんたが邪魔するから、うう、私は、幸せになれない！ あんたが邪魔するせいで、あんたが！」

私が邪魔を……？ どういう事？ 私迷惑なんかかけてないよ？

お母さんの役に立てるように頑張ってるんだよ？ ねえ、なんで邪魔なんて言うの？

「あんたがいるだけで迷惑なのよ！ いい加減にして、これ以上あたしの……邪魔しないでえ……」

……そっか、私っているだけ、ただいるだけで迷惑なんだ。

「あんたが！ あんたが！ どうしてあんたなんかが、ああああ！」

お母さんはそう言い続けながら、何度も何度も私を殴りつけた。

よろよろとしたその攻撃はそれなりに痛かったけど、私は避ける事なくその場に立ち尽くした。

「私っているだけで迷惑なんだ」

お母さんに殴られながら、ぼつり呟いた。言葉に出すとそれは、あまりに悲しく、あまりに悲痛だった。しかしなぜか納得もいった。私の頑張りなんて意味も価値もなかった。どんなに私が頑張ったって、私自身が迷惑な害なす存在なのだから、私がどんなに頑張ったとしても無意味なんだ。

それならいつその事……

その時、ある考えが頭の中に流れ込んで来た。天の声とも言えるかもしれない。それはこんな私でも愛してくれるかもしれない人がいる、という事だった。

「お父さん……」

お父さんなら、こんな私でも愛してくれるのかな。

もしお父さんでも駄目なら私は……

動かなくなつたお母さんを取り越えて、私は家を飛び出した。

はやる男

俺は高校時代の友達に片っ端から電話をかけまくっていた

「もしもし！ 山下か？ お前鷺沼って覚えてるか？ あ、俺だよ、俺。ほら高校で一緒だった。あーあー久しぶり、それより鷺沼って女の事知らないか？ 今何処に住んでるとか。ああ、そうか。え？ いや別に……」

星香が何処へ行ったのか心当たりはまるでなかった。かすかな手がかりは香だけ、そして香の居場所を知っているかもしれない友人へと電話をかけるしか出来る事はなかった。

「いや、もういいよ。じゃあな」

しかしそう簡単にはいかなかった。なにせもう二十年近く前の話だ。

星香の母親、香とは高校の時少しの期間だけ付き合っていた。俺はいわゆる反抗期真っただ中の頃で、当時はかなり荒れていた。両親や教師、その他にも手当たりしだいに敵意をまき散らし、自分が思うがままに生きていた。

そんな頃に付き合い始めたのが香だった。今思い出しても馬鹿な女だった。俺の方から言い寄ったら、拍子抜けしてしまう程すんなりと落ちた。

そんな始まりであつたから俺の方は少しも真面目に付き合い合つてなんかいなかった。そして相手もそうなのだろう、と勝手に思っていた。

だがその考えは違った。俺はその時から他人に興味を持つという意識が足りなかったのだらう。

後から知った事だが、香は小さな頃に両親から虐待を受けていたらしい。そして高校生であつた当時は両親とは離れ、親戚の家に居

候という肩身の狭い暮らしをしていた。親の愛情を受けずに生きてきた香にとつて、付き合っていた俺という存在は特別なものになっていたのだろう。

香が妊娠した時。俺には理解が出来なかった。香が何を考えているのか。そして知ろうとも思わなかった。

ただ、ただ拒絶し、関係を断とうと必死になった。

ちょうどその頃、学校の暮らしに飽き飽きしていた俺は、半ば逃げんのかのように学校を辞め、それ以来香とは一切連絡を取らなかった。

だから俺は何も知らなかった。

その香が俺の子供を本当に産んでいて、そしてその子供が星香で、そして……星香が香を殺したなんて。

今星香は何処にいるのだろうか？ 母親を殺し、父親である俺に拒絶された今、何を考え何を思っているのだろうか。

親に拒絶される辛さ、俺にとってそれは骨身に沁みる程わかる事だった。昔から自分勝手だった俺は、子供の頃には既に見放されていた。高校を勝手に中退した頃から今まで勘当状態が続き、今でもきつと俺の事など露程にも想っていない事だろう。

当時、親に拒絶されるという事は、まるで自分自身の存在が拒否されたが如く辛いものだった。

だが俺はいい、俺なんかただの自業自得だ。わがままに生きてその代償として親から愛情を受けられなかったただけだ。

だが星香は違う。星香は努力していた。香や俺に好かれようと必死で、懸命に努力を重ねてきたのに。

そしてそれが徒労に終わってしまった今、星香の心の中にはなにが残っているのだろうか。

手当たり次第に電話をかけ続けたが、少しの手がかりさえ見つからなかった。こんな事しても無意味かもしれない、そう思いつつ電話をかけ続けていると、なんとも意外な所から、香の手がかりが見つかった。

スロ友の石川だった。俺の高校時代の友人に石川という同姓の友達がいた。その石川と間違えて電話したのだった。

すると驚くべき事実がわかった。石川が付き合っていたのは香だったのだ。

俺は上野で石川と話していた時の事を思い出していた。

石川はなんと言っていた？ 彼女（香）が子供のいる事をずっと隠していて、そしてそれを知って香をぶん殴って別れた。

そう言う事か、その事実を踏まえると星香の日記にも納得がいく。俺はギリッと歯ぎしりをした。だが石川を攻めても仕方がない。

それより早く星香に会わなくてはいけない。住所を聞くと石川はあっさり教えてくれた。

「香の家なら###のマンションだよ、お前の家から近いんじゃないか？」

その住所には覚えがあつた。確かに言う通り俺の家から歩いても三十分程の距離だ。

「ありがとな、それじゃ」

「あ、ちよつと待てよ。そんな事聞いてどうすんだよ？ なんてそんなに慌ててるんだよ？」

「どうでもいいだろ、じゃあな」

耳元から電話を放し、ピツと通話を切った。

早く星香に会わなくては。俺はあの子に……。

俺はぐつと拳を握り決意を固めた。

闘う男

マンションはすぐに見つかった。高級マンションというのかもしれない。建物を見上げて俺はそう思った。ここ一帯は住宅街なのだが、その中でもかなりランクの高そうな外観だ。

エントランスへと入り階層ごとの表札を確認する。

「あつた……ッ」

そして五〇二号室の表札に鷺沼の名字を見つけ出した。エレベーターを待つのももどかしく、俺は階段を一段飛ばしで駆け昇った。早く、早く、と気持ちばかりが焦る一方、足は言う事を聞かず途中で立ち止まりそうになってしまった。エレベーターの方が早かったかもしれない。

そんな事を考えながらもようやく五階へと到着、俺は着くと同時に扉の右横に取り付けられた呼び鈴ボタンを押した。

ピンポン、と画一的な音を聞きながら、呼吸と心拍音を整えようと胸に手をあてた。ドクンドクンと高鳴る心音を鎮めながら、意識を集中させた。

この中に星香は居るのだろうか？ もしここに居なければもう手がかりは何もない。星香になんとしても会わなければ。俺の言葉届くかはわからない、だがなんとしても言わなければいけない事がある。

少しの間待つてみたが反応はなく、俺は呼び鈴をもう一度押してみた。ピンポン、ピンポンと何度か連続で押してみたが反応はなかった。

「星香！ いないのか！？ 俺だ、返事してくれ！」

右手で扉をガンガンと叩きながら、声をあげても意味はなかった。仕方なく俺はドアノブに手をかけゆっくりと下に捻った。

手前に引いてみるとドアは普通に開いた。鍵はかかっていなかったのか。ゴクンと息を飲み込んで俺は、部屋の中へと身体を滑り込

ませた。

二人暮らしにしてはずいぶん大きな部屋だった。玄関から見て左方にキッチン、右方の扉はおそらくバスルームに繋がっているのだろう。そして正面に続く通路は一枚扉で仕切られていて、奥の方は見えなかった。

「星香ー！ 居ないのか！？」

左方のキッチンは奇麗に片付いていて、洗い物はおろか目に見える場所には食器の類は見つからない。

キッチンの前にはテーブル（五人くらいなら余裕で座れそうなくらいの大きさ）があり、その下に香がいた。

「う、うう……」

フローリングに広がった血液はすでに変色していて、黒い染みのようになっていた。死因は見ればすぐにわかった。香はテーブル下でうつぶせになって倒れている。そして背中には料理包丁が刺さったままだからだ。

反射的に吐き気がこみ上げてきた。この場を立ち去りたい、そんな欲求がうまれてくる。しかし……

俺は香であった肉片を置き去りに進み、奥へと続く一枚扉を開いた。

「星香！」

扉の先は十畳程の居間へと繋がっていた。黒皮の二人がけソファーが二つ、大きな薄型テレビが右正面に見える。

もうすぐ日が沈むのだろう。部屋の電気は点いてなく、ベランダへと続く正面の窓からの朱色に染まった太陽の残光だけが部屋を照らしていた。

そして……星香はそこにいた。ソファーに腰かけ、その視線は自然と正面に置かれた、何も映っていないテレビへと注がれている。

俺がいる場所からはその横顔しか見る事が出来ない。だがその異常さは明白だった。

四肢の力が抜けきった星香は、まるでそこに置かれただけの人形のようなのだ。

「おい、星香？」

俺の来た事に気付いていないのだろうか？ 歩み寄ってその視線の先に入り込んでみてもなんら反応を見せてはくれない。まさか……

「おい！ しつかりしろ！？」

不安にかられ肩を揺さぶり、そしてさらに声を荒げた。

すると星香の瞳が、亀のような緩慢な動きで俺を捉えた。まるで夢でもみているかのようなトロンとした瞳だ。

「なんで、ここに？」

「お前を迎えにきたんだ」俺は力強くそう伝えた。

「……？ 迎えに？」

「ああ、そうだ。俺が面倒みてやる。これまでみたいに一緒に暮らそう。もう迷惑だなんて言わねえ。香の事も全部俺に任せろ」

もう覚悟は出来ていた。星香の家族になろう、そう決心してここまでやって来たのだ。だが星香の反応は俺の予想とはまるで違うものだった。

「ああ、そうか……迎えに来たんだ」

星香はそう言うのと、すっとソファから立ち上がった。

「え？ おい、どうした？」

そう問いかけても返事も振り返る事なく星香は玄関へと向かって歩いていった。

「おい、どこ行くつもりだ」

その背に付いて歩いていくと星香はキッチンで立ち止まり、そしてしゃがんだ。ちょうど香の死体がある辺りだ。

星香はそつと背に刺さった料理包丁に手を添えて、一気に立ち上がった。その凶器はあっけなく抜け、星香の右手へと納まった。

そして俺の左腕に突き刺さった。

「ぐああああ!？」

切っ先が力こぶの下部、上腕の骨に突き刺さったようだ。ありえない痛覚と出血が溢れてきた。

「ねえ、なんで避けるの？ 迎えにきたんだしょ？ 何してるの？ はやくこつち来てよ。消えに来たんでしょ？ 偽物なんでしょ？ 助けに来てくれたんだよね。よかった、これで私は本当になれるんだよね。うれしいよ。うれしい、うれしい、sれしい。うれしいよ!！」

「お前ツ、うつ痛ツ……。どうして、どうしたんだよ!？」

「偽物がなくなれば、本当になれる。嘘がなくなれば、本当になれる。私が偽物？ そうじゃないよね、お母さん達だよね？ 私を認めてくれないのはお母さん達がいるからだだったんだよね。私は居るんだもん。居たいんだもん!」

語尾を荒げてそう言つと、星香は突き刺さった料理包丁をさらに押し込んだ。

「ぐあ……ぐはッ」

さらなる痛みが全身に走ったが、俺は悲鳴をあげるより先に星香の右腕を掴み上げた。

「お前、どうしたんだよ!」

「愛してくれない両親は、私の本当じゃない。誰も私を愛してくれない。誰も優しくしてくれない。どんなに頑張っても頑張っても……本当じゃないから、本物じゃないから、そうだったんだ、だから全部壊さなきゃいけないの!」

星香は余った左手も料理包丁に添えて両手で、力を加えてきた。片手しか使えない俺は少しずつ押されていく。

「お前に会いたくて、せつかく会えたのに」

「なんで、なにが？ なんでそんな嘘、いまさら……言つの?」

「うそなんかじゃ……ねえ!」

強引に引き寄せ、強く抱きしめる。

「全部本音を話してやる。昨日俺が言つた事は嘘だったんだ。俺は

お前と一緒にいるのが本当に気に入ってたんだ。居心地がよくて、一緒にいるだけで嬉しい、そんな風に感じていた。……だけどお前から話を聞いて俺は悔しかったんだ」

「……悔しい？」星香が疑問符を浮かべて聞き返す。

「そうだ、俺はお前の事を好きになつていた、だからお前も同じ気持ちで側に居るんだと、そう思い込んでいたんだ。だけど、そうじゃなくて、ただ単に俺がお前の親だから居るだけだと知って……悔しくて悲しくて……」

「そんな事……」

「わかつてる！」

俺は星香の言葉を遮り、声を荒げる。

「お前の日記を見たんだ。だからお前の気持ちはわかる」

「嘘だ！！」

「ぐうあああ！」

星香の持つていた包丁が俺の右腿に突き刺さった。

「いまさら！　いまさらそんな小さい希望なんか知らない！　嘘に決まってるんだよ！」

そう言つと、包丁を抜き取り一歩後ずさりした。そして両手で握りしめ、切っ先を俺の心臓へと構えた。

「いやああああ！」

包丁が心臓めがけて近づいてくる。だが俺はそれを避けようともせず、それよりも星香に言葉を伝える事を優先させた。

「俺はお前を愛してる！」

鋭い切っ先が胸に触れ、そして刺さる事なく手前で止まった。包丁が床に落ちた。

「うわあああん、ああんん！」

悲鳴をあげて泣き出した。背を丸め小さくなり、血に染まった手のひらで顔を覆いながら、星香は泣き続けた。

目の前で震え泣き続ける星香の身体を、俺は固く抱きしめた。

「俺が、これからはずっと一緒にいるから、だからもう無理しなく

て良いんだ」

「おとう、おと……ぐすん、ぐすん……」

「そうだ、俺がお父さんだ。家族なんだ。だから一緒にいる。当たり前前だ」

「おとうさん、おとうさん、おとうさん！ うあああんん！」

星香は俺の胸の中で「おとうさん」と何度も叫びながら、いつまでも泣き続けた。

働く男

「お疲れさまでーす」

とあるガソリンスタンド、従業員の詰め所部屋。男は快活な声で挨拶をした。清潔感のある短髪、さりげない笑顔を纏った、誰が見ても好感を持つような爽やかな男であった。

「おお、来たか」

部屋の中には店長と現場リーダーの二人が居た。店長は白髪の混じった五十代の男性。デスクの前に腰掛け、なにやら書類に眼を通している。

その店長が男に向かって声をかける。

「わざわざ呼び出して悪かったね、さあこっちに来なさい」

「はい、失礼します」

促されて男は、店長の座るソファの正面へと腰かけた。

「どうだ、仕事は慣れたか？」

店長が馴れ馴れしく話しかける。

「はい、まだまだ未熟ですけど少しは慣れてきたと思います」

「君なかなか評判がいいみたいだな、今彼ともその話をしていたんだ」

店長が視線をリーダーへと向けた。

筋肉隆々、筋肉番付に出てもおかしくないような体格をしたリーダーが男の評価について話し始めた。

「そうですね、お客様への対応も非常に丁寧ですし、なにより仕事ぶりが誰より真面目です」

「いや、そんな、ただ必死になって頑張ってるだけですよ」

男は照れくさそうに頭を掻いて謙遜する。恥ずかしくなった男は会話を变えようと試みた。

「あの、それでお話というのは？」

「ああ、そうだな。君が働き始めて今月で半年だろ？ 前越リーダーの勧め

もあつて正社員として契約してもらおうと思つ……」

「ほつ本当ですか！」

男は店長の言葉を遮り、驚きの声をあげた。その声は非常に弾んでいる。

「はつはつは。そんなに喜ばれると嬉しいものだな。正式には来月からという事になる」

言いながら店長は席を立ちあがつた。そして男に近づき、その肩をポンポンと叩いた。

「君には期待してるよ。頑張ってくれたまえ」

「あ、ありがとうございます！ 一生懸命頑張らせてもらいます！」
男は深々と頭を下げ感謝の言葉を続けるのだった。

男が退出した後、店長とリーダーの二人だけが部屋に残っていた。
「良い青年だな」店長が煙草に火を点けてそう言った。

「そうでしょう。きっとこれからも良くしてくれますよ」

リーダーが自信満々に返事を返した。余程あの男を気に入っているのである。

ふーと紫煙を噴き出しながら店長が言葉を続けた。

「彼の職歴って聞いた事あるか？」

「え、そう言えば……いや聞いた事ないですけど？」

「そうか」

店長は「これは内緒の話なんだが」と前置きしてから言葉を続けた。

「彼は今までニートだったらしい。今までニュース等で耳にした事はあつたが、私は本物を見るのは初めてだったよ」

「え！？ そ、そうだったんですか！？ ……信じられないな。」

……でも店長よくそんな事知って雇いましたね。運良く彼はしっかり者だったから良かったけれど。まるでギャンブルじゃないですか」

「いや私には確証があつたよ、彼が誰よりも真面目に働くからね」

店長は煙草を吹かしながら、口の端をつり上げ柔和に笑った。

「なんですか、その確証っていうのは？」

「それはな……ふー」

店長は煙草を灰皿に押し付けて火を消した。そして一息置いてから言った。

「子供が出来たんだそうだ」

「えっ？ それだけ……ですか？」

「親が子を育てるでなく、子が親を育てるという事だな」

「あの、自分いまいち意味がわかんないんですけど」

「バーロー」

店長はリーダーの頭を叩き会話を終了させた。

男は喜びを顔に貼付けたまま家路を走っていた。
築何年経っているのかわからない程ぼろぼろの木造アパート二階建て。

家にたどり着き、男は扉を開けた。

「あ、おかえりなさい。お父さん」

少女が男を出迎えてくれる。その少女に向かって男は満面の笑みを返す。

「ただいま、星香」

働く男（後書き）

このラストが書きたいというだけでここまで長々と書き続けてしまいました。

この作品は初めて最後まで書ききれた作品です。途中何度も挫折しそうになりましたが駄作でもとにかく完成させよう、と鞭打って執筆。構想から一ヶ月で完成（？）できました

丁寧に手直しをすれば面白くなるのか？ それとも設定からしてつまらなかったのか、どれか感想お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9080r/>

ハムスターさえ養えない男

2011年4月24日22時41分発行